

宮本地車嘯



第 12 回「市民の誇り 岸和田城」

岸和田城周辺が記念事業で大変美しくなり足を運んだ方も大勢おられることと思います。さて、我が宮本地車にもこの市民の誇りとも言える岸和田城の彫物が刻まれていることをご紹介したいと思います。後屋根懸魚^{げんぎょ}、波頭に千鳥が細やかに細工されているその奥に「岸和田城に御来光」の彫物が輝いています。



後屋根懸魚、遠目に見ただけでは奥板は見えないでしょう。

懸魚の前板を外した状態の写真です。岸和田城の後からの御来光は金色に彩色され豪華な印象です。ぜひ懸魚を覗き込んでご鑑賞下さい。

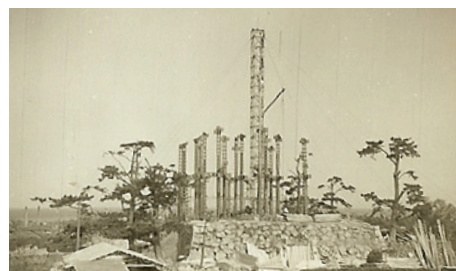
岸和田城の歴史は古く、1334 年前後に現在の岸和田城から 500 メートル程東（野田町 1 丁目周辺）に和泉国守護であった楠木正成が甥に当たる和田高家^{にぎたかかいえ}を岸和田に派遣して造らせたのが岸和田城（古城）であり、現在の場所に移ったのは応永年間（1394 ～ 1427）と言われています。戦乱の世を経て豊臣の時代となり、城主は小出秀政となりました。ちなみに小出秀政の妻は秀吉の母（大政所）の妹であり秀吉の叔父にあたる人物でありました。その後松平家、岡部家代々と時代と共に城主は代わり明治時代を迎えましたが、明治になる 40 年ほど前すでに落雷により天守は焼失していたそうです。



「泉州岸和田城図」（部分）正保年間（1645 ～ 1648）に描かれたもので現在の三層天守と違い壮大な五層天守であったことが分かります。

第二次大戦の終戦を迎えたまもなく、昭和 29 年に現在の天守が再建されることになりました。この再建まで 126 年間、岸和田城に天守が無い事を市民は悲しんでいたのかもしれませんが。鉄筋コンクリートの三層天守は国や市からの補助金だけでなく、市民一人ひとりの寄付により再建されたとのことです。何とか天守閣を復興させたいという思いや、焼失した天守閣が、隣の徳川御三家・紀州藩の三層よりも壮大な五層であったと伝えられてきたことを、市民が誇りにしてきたことなどが再建への強い原動力となったと思われます。

こうして甦った岸和田城は現在の我々にとっても大いに誇らしいものであり、この城が地車に刻まれていることは大変うれしいことであり、自慢したくなることでしょう。



昭和 29 年復興工事